

コース概況 2 斜里岳（旧道～新道周回コース）

北海道東部、オホーツク海沿岸の平野から大きくそびえる斜里岳は、道東を代表する名山の一つであり、日本百名山にも数えられている。標高は1547m（なお、三角点の標高は1535.5mである）。周囲の平野から独立してそびえるような端正な山容は遠くからでもよく目立ち、天候の良い日にはオホーツク海沿岸の各地からその姿を望むことができる。

斜里岳は千島火山帯の一部である阿寒-千島火山列のほぼ中央、北海道東部に位置する独立峰の成層火山である。そのため山頂からの展望は非常に広く、オホーツク海と道東の山々を同時に望める点が大きな魅力である。快晴時は、北東側に羅臼岳から続く知床連山や、遠音別岳、海別岳などの知床半島の山々、南西側には屈斜路カルデラをつくった屈斜路火山群や阿寒カルデラを形成した雌阿寒火山群や雄阿寒岳を望むことができる。斜里岳自体の噴火活動は終了しており、最後の噴火から長い時間がたって侵食や風化がすすんでいることから、馬蹄形の崩壊地形や深い沢が刻まれているのが特徴である。また、北側の清里町や斜里町側には火山麓扇状地が広がっている。このため斜里岳の登山道は沢や崩落地、尾根歩きなど北海道の中でも変化に富んだ登山を楽しめる山として知られている。

現在もっとも一般的に利用されている登山ルートは、山の南側にある清岳荘を起点とするコースである。登りに旧道（沢沿いのルート）、下りに新道（尾根ルート）を利用する周回コースが広く利用されており、往復の標準行動時間は7～8時間ほどである。旧道は沢を何度も渡りながら滝の横を登っていく変化に富んだルートで、斜里岳らしい登山を味わうことができる。一方、新道は尾根を下る比較的安定した登山道で、展望を楽しみながら下山できるのが特徴である。

6月下旬の斜里岳は、雪解けが進み初夏の山の姿へと移り変わる時期である。標高の低い部分では登山道の雪はほぼ消えているが、沢沿いのルートでは雪渓が残ることもある。また上部では馬蹄形の崩落地に雪田が部分的に残ることがあり、渡渉とあわせて足元には十分な注意が必要となる。特に早朝は雪面が凍結している場合もあり、状況によっては軽アイゼンが役立つこともある。

登山口のある、清岳荘は標高約680mの位置にあり、深い森に囲まれた静かな山小屋である。清岳荘の横からミズナラを主体とする広葉樹の登山道を300mほど歩くと、林道と合流する。さらにここから650mほど歩くと、旧登山口に到着し、本格的な登山道にはいる。

ここから1000mほど一の沢川を、渡渉を繰り返しながら高度を上げていくと、新道との合流地点である下二股（810m）に到着する。下二股の手前には、旧清岳荘跡（火事で焼失）があり広く平らな場所で休憩をとるにはいいであろう。下二股から先は本格的な沢詰めコースで、上二股までの区間には名前のついている滝が8つ存在しており、それぞれ表情の違う滝を見ながら登れるのがこのコースの醍醐味といえる。しかし、5月末から6月末までは融雪期と重なり沢の水量が多くなることから、徒渉には十分な注意が必要である。下二股を出発して水蓮の滝から羽衣の滝までの区間は、何度も徒渉を繰り返したり足場の滑る岩場を歩いたりするが滝をまく道を除くとそれほど傾斜はきつくない。羽衣の滝を越えると傾斜がきつくなり、難易度が上がる。沢を巻くよう上る道でも万丈の滝は滑状で長いため流量が多い場合は滑落の危険があるため慎重な行動が求められる。これを越えると見晴らしの滝の上部にでる。ここから、来た道を振り返ると清里

町の町並みや遠くに濤沸湖やオホーツク海を望むことができる。さらに進むと左岸に竜神の滝が見えてくるが、ルートは右岸の七重の滝の方なので道迷いをしないように気をつけよう。最後の霊華の滝を過ぎると徐々に傾斜も緩やかになり、上二股(1,230m)までは一息である。ここまでのコース上では、白い花をつけるゴゼンタチバナ、小さな花が並ぶマイヅルソウ、**淡い白色の花を連ねるツバメオモト**などが見られる。これらは北海道の山地の森でよく見られる植物で、雪解け後の短い期間に一斉に花を咲かせる。また湿った場所では黄色い花をつけるエゾノリュウキンカが見られることもあり、沢沿いの環境らしい植物相を観察することができる。

上二股付近から周囲の植生はダケカンバへと変わり、少しずつ視界も開けてきて沢の流れも細くなり、やがて源頭部に近づく。さらに高度が上がるとハイマツ帯に入り尾根に近づくにつれ視界も開けてくるが、6月下旬では雪渓が残っていることもあり雪の上を通る場合は、踏み抜きや滑落を防ぐため、慎重に通過したい。上二股を過ぎて少し登ると胸突き八丁と呼ばれる急な登りが1,430mの馬の背向かって続く。馬の背直下の登りは露頭が崩壊している足場の悪い急斜面なので、歩行には細心の注意が必要である。馬の背にたどり着くと一気に眺望が開け、オホーツク海側の平野が広がり、遠くには知床連山の山並みが見えることもある。また6月下旬にはハイマツの間にイソツツジの白い花が咲き始め、初夏の高山の雰囲気を感じられる。

馬の背から短い急登を登ると斜里岳神社がある尾根に出る。ここは右側が大きな崩落地となっており注意が必要だ。ここを過ぎるとピークに登る岩場の急登となりこれを越えれば360度の大きなパノラマの広い山頂に到着する。ここまでの尾根道は清里町と斜里町の境界となっている。

下山は上二股で左側に折れて新道に入る。新道は尾根を下るルートで展望がよく、振り返ると登ってきた斜里岳の山頂部を見ることができる。旧道のような渡渉はなく比較的歩きやすく、緩やかなアップダウンを繰り返しながらハイマツ帯の中を1,230mの熊見峠まで下りてくると、右の尾根に向かって道が続く。6月下旬の尾根道では、イソツツジやコケモモなどの低木が花をつけていることがある。このあたりで植生はダケカンバを中心として広葉樹の林となる。新道のハイライトは1,050m付近から始まる急斜面であろう。これまでのなだらかな尾根道とは違い、湿った泥質の滑りやすい道を下二股までの高低差200mを一気に下ることになる。この道は非常に滑りやすく転倒やスリップなどによる怪我をしやすいため焦らずゆっくり下りて欲しい。下二股からは登ってきた道を下りることになる。この区間では林床にゴゼンタチバナやマイヅルソウが広がり、初夏の森の雰囲気を感じながら歩くことができる。

6月下旬の斜里岳は、雪解けの沢と初夏の森林、そして展望の広がる高山帯と、多様な景観を楽しむ時期である。沢沿いのルートは滝や渡渉が連続する変化に富んだ登山道で、北海道の山の中でも特徴的な登山体験ができる。一方で雪解け水による沢の増水や残雪など、この時期特有の注意点もあるため、装備と時間に余裕を持った計画が重要である。

沢の音が響く深い森から高山の展望へと至るこの登山コースは、道東の自然の魅力を凝縮したようなルートであり、斜里岳が多くの登山者に親しまれている理由を実感できる山である。